年金世代に贈る essay

スポーツの力を信じて

～NPO法人理事長として全国を駆け回る日々～

元女子ソフトボール日本代表監督
宇津木 妙子

東日本震災復興＆オリンピック競技復活祈願
「第5回 宇津木妙子杯中学生交流ソフトボール大会」にて
（2016年4月29日　気仙沼市）

3月26日、まだ肌寒い宮城県多賀城市で「第3回三陸沿岸中学校女子ソフトボール大会」が開かれました。大会名には「震災復興祈念・オリンピック競技復活祈念」のフレーズとともに、恥ずかしながら、私の名前（＝宇津木妙子杯優勝旗争奪）も冠されています。宮城、岩手、福島、山形の4県から16チームが集まり、元気いっぱいにグラウンドを駆け回りました。

東日本大震災の爪痕が残る現地で、一日も早く子供たちに笑顔を取り戻してもらおうと大会が始まったのは2014年。きっかけは、私が理事長を務める「NPO法人ソフトボール・ドリーム」に届いた1通の手紙でした。

「津波でグラウンドを失った子どもたちがいます。1年に1度でもいいから、楽しい思い出が残るような大会を開いてあげられないでしょうか……」

被災地に住むソフトボール少女の保護者からでした。震災のショックを乗り越え、けなげにボールを追い続ける子どもたちの力になりたい――。いても立ってもいられず、すぐに現地の関係者と調整を行い、技術向上や選手間の交流を目的とした大会を企画しました。回を重ねるごとに子どもたちは上達を見せ、その表情も前向きに、明るくなってきたように感じています。

ただ、心に負った深い傷は簡単には癒えません。

以前の被災地での大会で、こんなことがありました。グラウンドの片隅でジャージー姿の新入生2人と談笑していた時、ふと、震災当時のこ

とを口にしたら、みるみる目を潤ませて黙り込んでしまったのです。

私はすぐ話を切り替えて、「でもね、私は毎年ここに必ず来るから、来年はもっと成長して、絶対にレギュラーになるんだよ」と伝えたら、元気よく「ハイッ」と返事が返ってきました。ちょっと心配になったけれど、その後、懸命にグラウンドを駆け回り、炊き出しでおいしそうにカレーうどんをほおばる笑顔を見たら、本当に救われた気持ちになりました。「今年もやってよかった、来年も絶対にやろう」——と。彼女たちに寄り添い、たくましく成長する姿を見届けるのが使命だと思っています。

今や、NPO活動がすっかり私のライフワークです。2000年のシドニー、04年のアテネ両五輪で代表監督を務め、09年まで実業団・ルネサス高崎（現ビックカメラ女子ソフトボール高崎）の総監督として現場に立ち続けました。一線を退き、今度は普及活動に力を入れようとNPO設立の準備を進めていたその時、「3.11」が起きました。ですから、NPOの活動理念には、競技の普及、振興に加え、東北地方の復興支援も明記しています。

目指すのは、老若男女、さらには身体障がい者、知的障がい者などの垣根を越えて、日本にスポーツ文化を根付かせること。ソフトボール界でも、車椅子ソフトボールの全国大会が開かれたり、日本初の知的障がい者の女子ソフトボールチーム「武蔵野プリティープリンセス」（埼玉県）が発足したりと、あらゆるステージで、多くの方々に楽しんでもらうプレー環境が整いつつあります。その普及、振興を手助けできるならば、私はノックバットを持って全国どこにでも駆けつけるつもりでいます。「死ぬ時はノックバットを持ったまま、グラウンドで倒れたいなあ」なんて、本気で思ったりしているくらいですから。

そんな私の悲願は、20年の東京五輪で野球・ソフトボールが実施競技として復活することです。08年の北京大会を最後に、ソフトボールは五輪競技から外れたままです。世界最高峰の舞台で戦う誇りと喜び、緊張感を若い世代にも絶対に味あわせてあげたい。そして、もう一つ。国内五輪の開催をきっかけに、ソフトボールの「聖地」となるようなスタジアムをぜひ作りたいという夢も持っています。競技に取り組む少年少女の目標となる、野球における甲子園のような場所——。その実現に一歩でも近づくために、私はこれからも地道な普及活動を続けていくつもりです。

そして、国内で行われる五輪は、多くの人たちがスポーツに親しむ絶好の機会でもあります。自ら体を動かしたっていいし、スタジアムやテレビで観戦してもいい。被災地の少女たちにソフトボールが笑顔を与えたように、スポーツには人々を勇気づけ、前向きな気持ちにさせる不思議な力があります。東京五輪の開催を、国民一人ひとりにスポーツ文化を根付かせるきっかけにしたい——。スポーツに学び、育ててもらった人間として、その一助になれればこれほどうれしいことはありません。

PROFILE

宇津木 妙子（うつき たえこ）**氏**

埼玉県生まれ。中学1年生からソフトボールを始め、日本代表として世界選手権にも出場。現役引退後は、ソフトボールリーグの監督を経て、1997年日本代表監督に就任。2000年シドニー五輪銀メダル、2004年アテネ五輪では、「宇津木ジャパン」として活躍、銅メダルを獲得。日本代表監督退任後、2005年日本人初の国際ソフトボール連盟殿堂入りを果たす。2008年北京五輪では、TV解説者として日本女子ソフトボール金メダル獲得に貢献する。2014年世界野球ソフトボール連盟の理事に就任。2011年からは「NPO法人ソフトボール・ドリーム」を設立し、理事長に就任、ソフトボールを通じて、地域を超え、世代を超えて「スポーツの力で未来を」と、スポーツ文化の普及活動を続けている。著書に『宇津木魂　女子ソフトはなぜ金メダルを獲れたのか』（文春新書）、『ソフトボール眼』（講談社）他多数。